

# 国語

## 偏差値 50, 60の壁を乗り越えるための学習と指導

### 第1節 偏差値60の壁を乗り越えるための学習と指導・現代文

#### (1)層間差に見られる特徴

まず、学力 A 層の正解率から学力 B 層の正解率を引いた「差」について、前回の調査と今回の調査を比較して、その「差」が大きくなった設問に着目した。

学力 A 層と学力 B 層の境界の偏差値は 60 前後に設定してある。そのため、「学力 A 層の正解率と B 層の正解率の差が（過去に比べて）大きくなった設問」は、現在の生徒が偏差値 60 を越えようとするときに、以前の生徒が感じた以上に「壁」の存在を感じやすい設問といえることができる。

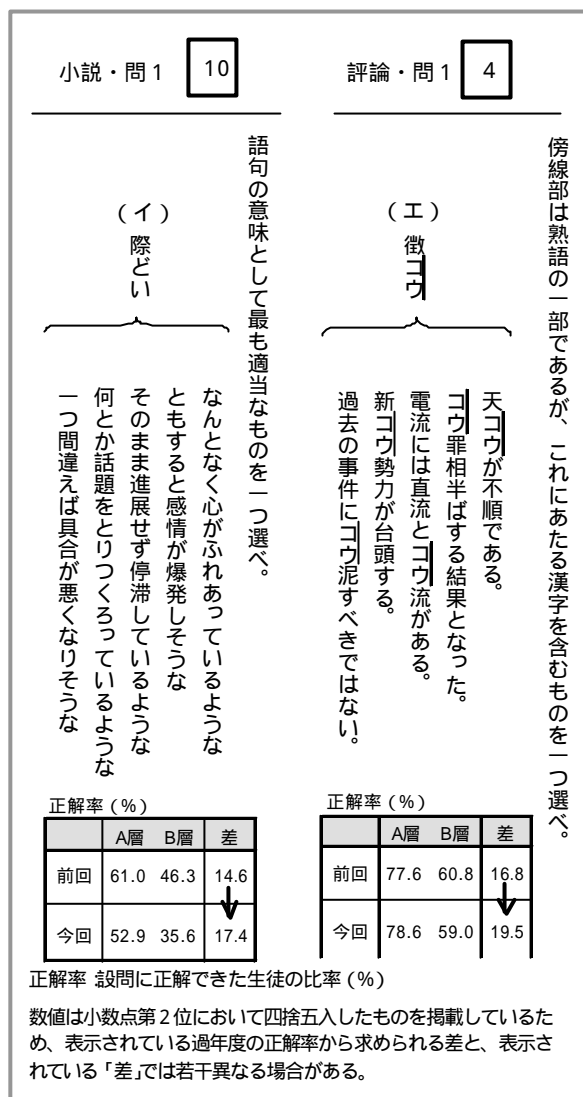
この視点から、二つの問題を指摘したい。

一つは語彙に関する問題である（図 1）。選択肢にもよるが、「エン（演）劇」など、生徒が日常的に使用することの多い語彙については学力層間で正解率の大きな差は見られない。しかし「徴コウ（候）」などのように、日常的に使用することの少ない語彙の書き取りに関しては、下位層の生徒はもちろんのこと、B 層に該当する中上位程度の学力がある生徒についても漢字力の「もろさ」が見て取れる。一方「際どい」などのように、普段目に触れ

各学力層の区分定義

A層	B層	C層	D層	E層
SS60以上	SS55～60	SS50～55	SS45～50	SS45未満

図 1



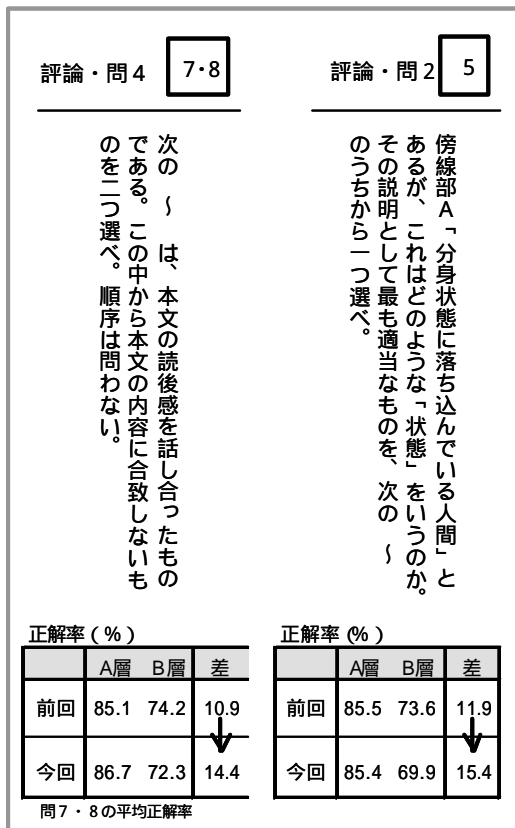
(注) 本文で紹介するデータは、全て本調査の参加者全体 (15校) の合算集計である。

集計人数 (国語受検者)

前回	平成 8 年 (評論・古文) 4,871 名 平成 7 年 (小説) 4,931 名、(漢文) 4,506 名
今回	平成 13 年 4,178 名

耳にしている語句でも、その語義についてはあいまいなことが多い。センター試験にも頻出するこの種の問題は、「語義 例文 文脈」という確認作業が必要となる。硬質な文章に頻出する語句の書き取りの力や、語義をしっかりと踏まえた上で文脈から語句の意味を判断する力の有無が、偏差値 60 の壁を越える上でカギを握りそうだ。

図 2

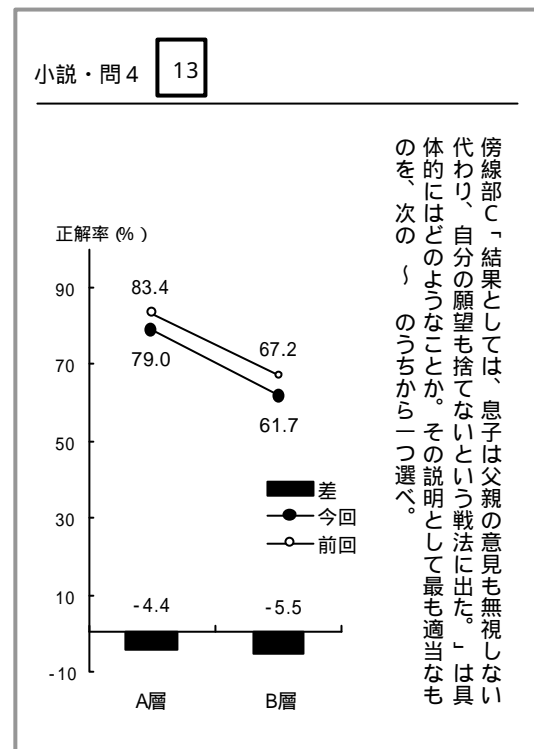


もう一つが論理的思考力にかかわる問題（図2）であり、現・古・漢を問わず、全ての分野でこの能力の低下が見られる。評論・問2は傍線部の内容を説明する言葉として、傍線部以降の広い範囲からキーワードを見つけ出さなければならない。また、段落相互の関係性をとらえる力も要求される。評論・問4は要旨の把握に関する設問であるが、選択肢が本文に「書いていないこと」にまで言及している点を見落としがちである。センター試

験形式の問題の場合は選択肢の細かな検討も必要であり、その能力の差が如実に表れたといつてよい。きめ細かな読み取りの力と、大まかにとらえる力の両方が現代文読解には不可欠であり、その前提として読解のスピードの有無が明暗を分けるのは言うまでもない。

その他で前回に比べて、学力A層・B層共に大きく正解率が低下したのは小説・問4（図3）である。

図 3



この設問では「父親の意見」「自分の願望」の二つの内容を、本文からの的確に読み取らなければならない。家族の状況や父子の考え方の相違を文章全体から読み取らせる問いで、やはり内容を大づかみにとらえる力が要求されている。また「戦法」という語句のニュアンスを正しく説明した選択肢が正解となっており、言葉に対する柔らかな感受性も必要である。

## (2)学力層別・学習習慣に見られる特徴

学習習慣に関する調査で興味深いのは、「毎日欠かさず授業の予習または復習をする」「宿題があれば必ずする」という調査項目に対し、「非常にあてはまる」「ややあてはまる」と答えた生徒が、学力 B 層に比べ学力 A 層の方が少ない点である。「古典の口語訳(予習)」についても同じ傾向が見られる。また、「現代文では次の授業で学習する範囲を、教科書を読むなどして一通り見ておく」と答えた生徒は、学力 A 層の方が多く、「授業では授業を聞くよりも板書を書き写すことの方に集中している」と答えた者は逆に A 層の方が少ない。

国語の学習に関する学力 A 層と B 層の生徒の違いは何だろうか。それは大げさに言えば「学ぶこと」についての本質的理解の差である。「考える勉強」と「覚える勉強」のどちらを「勉強」と考えているかの差と言ってもよい。学力 A 層の生徒は、より思考力を要する現代文的な勉強を重視し、授業では板書よりも授業者の説明に耳を傾けている(又は自分の思考に集中している)。本来国語が得意であり、理解できるという面もあるだろうが、予習をしないのは、授業中に言葉との出会いや思考を楽しむための彼らなりの手段かもしれない。高い学力を有する生徒に対して、予習しなくても理解できる程度の「食い足りない」予習課題しか課さないわれわれにも責任の一端があると言えよう。

本当の国語力を高める上で予習・復習が欠かせないとは言えない。しかし、偏差値 60 の壁を越えるために必要な学習態度とは、主体的に考えようとする姿勢ではないかと思われる。

## (3)学習指導の工夫

以上見てきたように、偏差値 60 の壁を越えるためには、語彙力のレベルアップ、論理的思考力の伸長、主体的に考える姿勢の育成が必要である。では、それぞれについて、どんな指導法が有効だろうか。

### 語彙力のレベルアップ

言葉は文脈の中に置かれてこそ、その意味と使い方が理解できる。評論に頻出する語を精選して小テストを実施し、語彙力の向上を図る方法もあるが、その場合にも必ず例文を示し、文脈の中で意味を確認させたい。また、語彙力は言葉を自ら使うことで定着する。例えば、生徒自身に例文を作らせるという方法が考えられる。生徒一人一人に重要語句を書いた短冊を配り、言葉の意味や同義語・対義語などを調べさせる。そして辞書の用例ではなく、自分で考えた例文を書かせて回収し、印刷する。一人 2 ~ 3 枚程度で「重要単語 100」の一覧表ができることになる。授業でその意味と例文(使い方)の妥当性を確認する。その後、小テストなどで定着を図ってもよい。

### 論理的思考力の伸長

学習指導要領が生徒の「意欲・関心・態度」の育成を掲げた時、グループによる調べ学習や発表形式の授業など、生徒の生き生きとした活動が見られた。生徒の主体的な授業参加があり、居眠りをする生徒は減ったように思えた。しかし、そこで論理的な思考力は身についただろうか。大学入試などの抽象度の高い文章を読み解く力は身についただろうか。高度な論理的思考力を育てる授業とは、生徒の思考の深まりを保障する授業である。授業者の発問に(または生徒の発言に)教室がしんと

静まり、一人一人が本文に立ち戻り考えをめぐらせるとき、その力は育つように思われる。対立する意見を生徒から引き出し、本文の表現を根拠に「読み」を深めさせる工夫が必要となる。考えるに足る発問を準備できなければ、特に学力の高い層の生徒の足は国語教室から遠のく一方であろう。

また、論理的思考力が最も必要とされるのは、表現活動においてである。本校では「総合的な学習の時間」にワークシート（記入例を次ページより掲載）を用いた小論文指導を行っている。生徒は各自、「国際化」「若者論」など小論文のテーマとして頻出する10余りのテーマの中から一つを選ぶ。その後、図書室を利用して自分の主張と根拠、予想される反論とそれに対する意見をワークシートにまとめる。それをういて800字程度の小論文を書かせている。小論文の出来よりも問題意識の深まりと思考のプロセスを大切にしたい学習活動であり、大変なだけに生徒の達成感も大きい。より高度な論理的思考力を養成するためには、生徒の思考に負荷をかける何らかの仕掛けが必要となるだろう。

#### 主体的に考える姿勢の育成

先に見たように、学力A層とB層の生徒ではその学習姿勢に違いがある。教材や与えられた課題に対して自ら主体的に考えようとする姿勢を身につけさせるには、どうしたらよいただろうか。

私は時々、疑問カードを用いた授業を実施している。初読の後、不明な部分を要素別にカードに書かせ、それをもとに授業プリントを構成し、授業を展開する（「疑問カード」を用いた授業プリントの例を後掲）。生徒の質問が授業に生かされ、生徒の授業に向かう姿勢は主体的なものとなる。また、生徒は意外な部分につまずくことが多く、彼らにとって学習

すべき事柄とは何かを再認識させられ、授業者自身が教えられることも多い。吉行淳之介の『童謡』という教材を授業で扱った際、主人公の「あし」を表現する言葉として「肢」「脚」「足」と三種類の漢字が使い分けられているのはなぜかと指摘した生徒があり、授業は大いに盛り上がった。主人公の置かれた状況やその心情を深く理解する上で非常に参考になり、生徒ともども作者の言葉に対する真摯な姿勢と、鋭敏な言語感覚に感心させられた。

主体的に考える姿勢を育成するには、授業や与える課題の工夫が欠かせない。「生徒の学習意欲を高め、授業に参加する場を積極的に与えること」、「生徒が取り組むに足る課題、授業に生きる課題を準備すること」、「授業者が生徒と一緒に考える場を生み出すこと」いずれも簡単にできることではないが、目指していきたいことである。

小論文指導における「ワークシート」/生徒の記入例

「ワークシート No.1」=テーマの設定

課題問題ワークシート No.1

1. 資料プリントで列挙した課題をめぐり、事例のうちあなたが最も関心を抱いたテーマを一つ選びなさい。

リサイクルの存続方(日本における)

3. 2で選択したテーマの問題点を指摘しなさい。

日本人のリサイクルに対する意識の低下  
リサイクルというものの認識の低さ

4. 3の問題を解決したり改善したりするにはどのような方策が考えられますか。具体的に書きなさい。

法律によるリサイクルシステムの確立  
一人一人の意識の向上

氏名	
番号	

2. 1で選択した事例の具体的内容、事象、背景、原因等について調べて書きなさい。

**日本の二歩処理・リサイクル取組の現状**

日本の二歩処理率 七五六 (スエデンに次いで高い)

→ 理念観念が困難であるから

→ リサイクルの浸透はリサイクル品と再生素材に集まるという事柄がある。上流有償の発生

→ リサイクルシステムの不十分さ

→ コミ探訪による併記

→ ガラス、紙、CO<sub>2</sub>増減、大気汚染

**ヨーロッパの二歩処理・リサイクルの現状**

→ 法律によるリサイクルシステムの確立

→ 廃棄物の発生抑制、再利用の優先

→ 生産消費、廃棄の流れと一つの枠組みで考える

→ 国民全体の関心が非常に高い

→ メーカーの責任

→ 無料回収の義務付け

→ リサイクル ↓ リターナル

→ 廃棄物の回収・再利用システムの構築と目的とした会社の設立 (民間企業)

→ 分別しやす、茶巾をカメラに使用できる

**廃棄物**

物質的に豊富に存在 → 廃棄物の発生をもたす

→ 天然資源消費のハズレ

参考にした資料については、その書名・著者名・出版社名等を必ず、記載しておくこと。

参考文献 「リサイクルー世界の先進都市から」  
甲中勝 監修 リサイクル花社

組	番	氏名
---	---	----

課題問題ワークシート No.2

ワークシート No.1に書いたことをもとに小論文の骨組み作りをします。

エの(答え)と対応する(問い)を設定しましょう。(ワークシート No.1の3を参考にすること)  
日本のリサイクルはどうあるべきか

(反論への反論)

- ・未来の地球を考えると、行動も、今私たちがとることが重要であること(資源の枯渇ほど)
- ・企業がリサイクルシステムにのっとって利益を創り出すことが可能である。(ヨーロッパの例)
- ・リサイクルシステムの確立が、環境と、私たちの生活を守ることになる。
- ・ゴミ処理場による有毒物質の問題の解消。埋立場不足の解消。

(反論)

エの(答え)にもが納得し得るだけの材料を挙げましょう(ワークシート No.1の2を参考にしたり、あなた自身の経験の中から身近な例を挙げたりするといでしょう)また、予想される反対意見への反論などの材料を配置しておきます。

- ・リサイクルが進んでいるヨーロッパの国々は、国民の意識が非常に高い。
- ・例>環境教育、消費者がメーカーを選ぶ、資源ゴミ回収率の高さ
- ・法律による徹底したリサイクル政策を行っている(廃棄物=資源)
- ・メーカーに廃棄物の回収を義務づける
- ・リサイクルしやすい製品
- ・日本人のリサイクルに対する知識、関心の低さ
- ・回収しても有効に活用できていない場合がある

ウ(予想される反論)

あなたの意見に対し、予想される反論を以下に記入し、あなたの書いた(答え)やその(検討)内容が反論に耐え得るものかどうか確認しなさい。

- ・製品の回収などによる企業への負担を考えるべきである。(企業利益の優先)
- ・リサイクルシステムの確立によってかかる国民への負担

ワークシート No.1の4に記入した事情があなたの答え(主張、結論、改善策、解決策)になります。

- ・国や世界を一つの単位と考えたリサイクルシステムの確立は重要
- ・国民一人一人の意識がリサイクルシステム確立の重要な要素の一つであること。
- ・リサイクル、リユース、リデュースをひとまとめとして考えなければいけません。
- ・リサイクルの前にはまず廃棄物を出さなければいけません。

これを基本に3段落構成ならそのまま序論・本論・結論、4段落構成なら本論を2つの段落に分けて置いていきます。

読者の読後感

ごみ問題を解決するためにその方法の中はリサイクルをすすめていくごみ自体を出さないという考え方もあつて、

ア 序論 (問い)

イ 本論 (検討)

エ 結論 (答え)

「疑問カード」を用いた授業プリントの例より一部抜粋 \*カッコ内は「疑問カード」を提出した生徒の名前(仮名)

「鉄塔に登る男」(沢木耕太郎)

国語 疑問プリント (組) (番 氏名)

内容探求

第一段落

「地下鉄漫才」のような疑問と、「私」の疑問はどこが共通しているのか。(熊谷・水野・小谷)

第二段落

問一 「あれは私たちが取り換えるんです。」「について」「私たち」とは誰か。(福岡 鈴木)

いきなりおじさんの話になるのはなぜか。(田中 清水)

「社で働いている さんに聞いてみました」などの説明なしに、いきなりこんな書き出しをしているのは、なにか意味があるのか。(矢部)

急に東京タワーに登る人の話になっているのはなぜか。(丸尾)

略

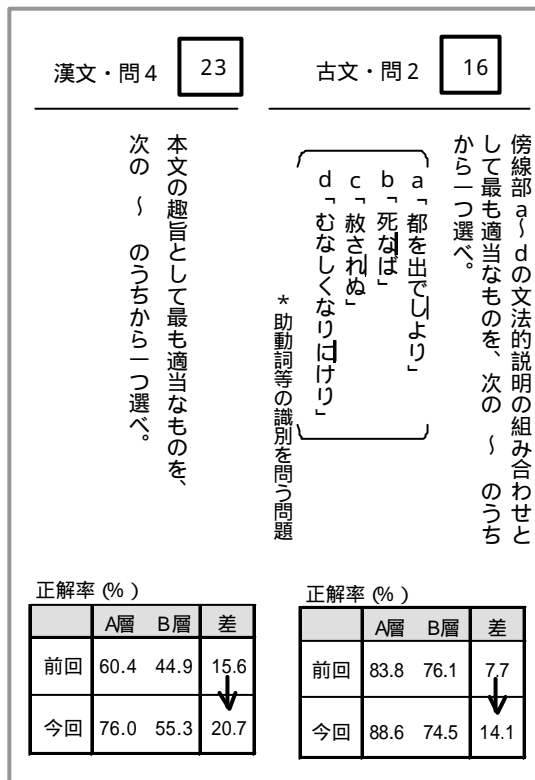
第2節 偏差値60の壁を乗り越えるための  
学習と指導・古典

前回と今回を比較して、学力A層とB層で層間差の広がり特に目立つのは、次の設問であった。(図4)

古文については、問1の(イ)を除いてほとんどの設問で層間差の広がりが見られた。問1の(ア)「つゆのゆかり」の意味や、右の問2 [16] の文法問題はいずれも基本的なものであり、特に基礎学力の有無が勝負の分かれ目になった。問3・問4などの内容読解にかかわる問題でも差は広がっており、指示内容やキーワードを読み取るなど、いわば現代文的な学力を必要とするものである。基本的な単語や文法事項、読解法の見直しが必要となる。

(出題内容は巻末掲載)

図4



現・古・漢の中で最も層間差が激しかったのが、漢文である。文章のレベルがやや難しかったこともあり、問2の訓読問題を除く全ての問題においてA層とB層の正解率に20%以上の差が見られる。句法や読みなどの知識の蓄積だけでは解けない問題が並んでいることが原因である。漢文は評論と同じく論理的な読解力を要する分野と言われる。最近のセンター試験でも難化の傾向が見られ、以前のように高得点が出にくくなっているが、この問題も実力の差が如実に表れた形となった。

(2) 学力層別・学習習慣に見られる特徴

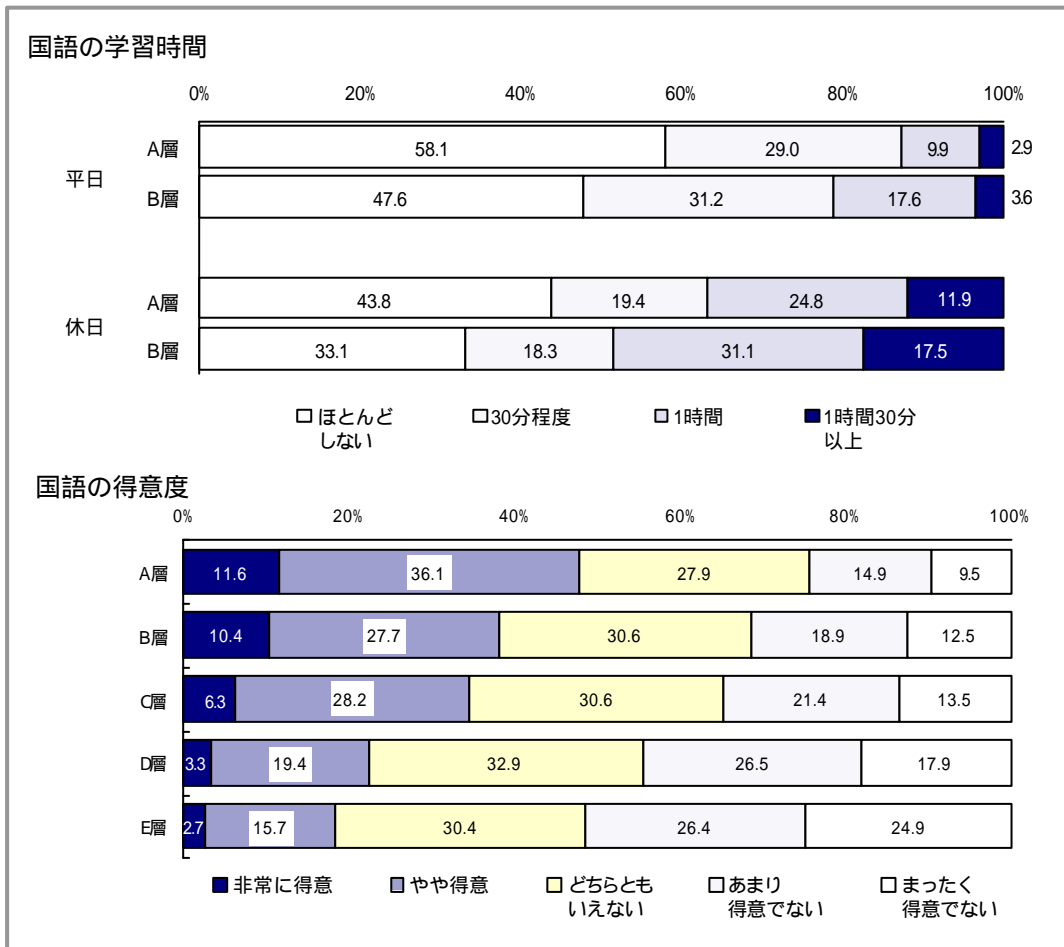
特徴的なのは、学力B層の生徒が学力A層の生徒に比べ、平日に予習・復習・宿題を行

い、口語訳（全訳）をして授業にのぞみ、休日も勉強しているにもかかわらず、「国語が得意である」と答えた割合が10%近くも下回っている点である（図5「非常に得意」、「やや得意」の選択率合計；A層47.7%、B層38.1%）。その原因はどこにあるのだろうか。

一つには、単語や文法を調べること・覚えること自体が自己目的化し、何のための学習なのかを見失っている点にある。単語や文法を調べる目的は、当然古典作品を深く読み取り、味わうためである。ところが、口語訳や文法事項の確認が済んだところで、その先を考えることを止めてしまう傾向がありはしないか。

また、読解の方法を習得できていない点も原因の一つと考えられる。完全無欠の美しい

図5





ノートを作成する生徒に限って、定期テストでは好成績を収めるのに、模擬試験では結果が出ないという場合がよくある。一行目から順を追って丁寧に口語訳や訓読を行い、文法事項や句法を書き込むことに一生懸命で、いきなりまっさらな古典の原文に向かうと、どう読んでいいのかわからない。読解の方法を意識して習得するよう仕向けることが必要である。

### (3) 学習指導の工夫

以上の点を改善するために、どのような学習指導が考えられるだろうか。

一つには予習させるべき基本的事項を精選し、授業の中でその必要性を実感させる手立てが必要になる。私たちは1時間の授業の中で、様々なことを教えすぎる傾向がある。強く印象に残る単語や文法が一つか二つあればよしとする、そんな思いきりも大切に思える。

例えば、『大鏡』の中で、繰り返し表れる語り手の言葉がある。「いみじ」という形容詞である。「程度がはなはだしい」「すばらしい」「ひどい」などの意味を、生徒は辞書から見つけてくるであろう。それぞれの場面で相応しい意味はどれなのか、その都度考えさせたい。そして、その言葉こそが当時の貴族の枠を越えた器量の持ち主である藤原道長への賛嘆と非難が入り混じった評価であることに気づき、道長賛美に終わらない『大鏡』の文学的特質にも通じることを知ったとき、生徒は古典の世界の奥行きを深さを知ることになるだろう。また一つの文法、一つの単語が読解に大きくかかわるものであることを実感することだろう。予習の姿勢も変わってくるに違いない。今回の古文・問4では、文中に3回出てくる「あはれなり」という語が筆者の心情を端的に表す言葉であり、その意味内容が問

われている。より高い古文読解の力を身につけるには、このような問題に対応するための力が不可欠である。

もう一つは古典読解の方法を習得させる授業を工夫したい。場合によっては思い切って予習を課さない授業があってもいいのではないかと考える。

『十訓抄』「大江山いくのの道」を扱った際に、そのような授業を試みたことがある。

ノートに原文だけを書写させる

会話の部分は無視し、地の文だけを  
読みとるよう指示する

登場人物を（四角）で囲み、その関係をとらえさせる

動詞に波線を引かせ、誰の動作か把握させる

心情語（形容詞・形容動詞）に傍線を引かせ、  
誰の何に対するどんな心情が考えさせる

などの学習活動を通じて、（会話部分を除く）地の文の用言を押さえることが文章構造の把握には不可欠であり、古文読解の基本であることを理解させた。

また、比較的内容をとらえやすい説話文学や随筆などを素材として、大意を把握させる簡単なプリントを授業の始めに配付し、いくつかのポイントを確認させるなどの実践を行っている先生もあり、有効な指導法であると考えられる。

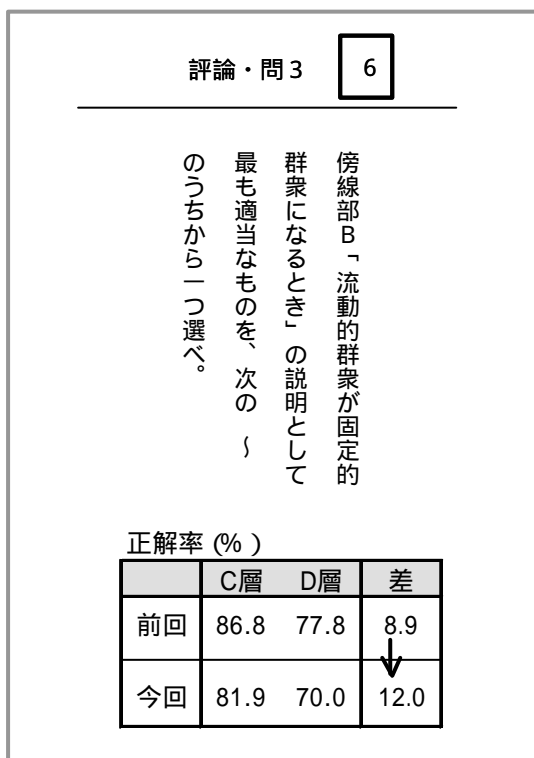


第3節 偏差値50の壁を乗り越えるための  
学習と指導・現代文

(1)層間差に見られる特徴

学力C層とD層の層間差には、どんな特徴が見られるだろうか。学力C層の正解率から学力D層の正解率を引いた「差」について、前回の調査と今回の調査を比較したところ、学力A層とB層の分析で見られたのと同じく、評論・問2に大きな層間差の広がりが見られる（学力C層の正解率 - D層の正解率 / H7 : 10.4 H13 : 15.3 ; 質問文は図2参照）。評論で他にC層とD層との正解率の差が広がったのは、次の設問である。

図6

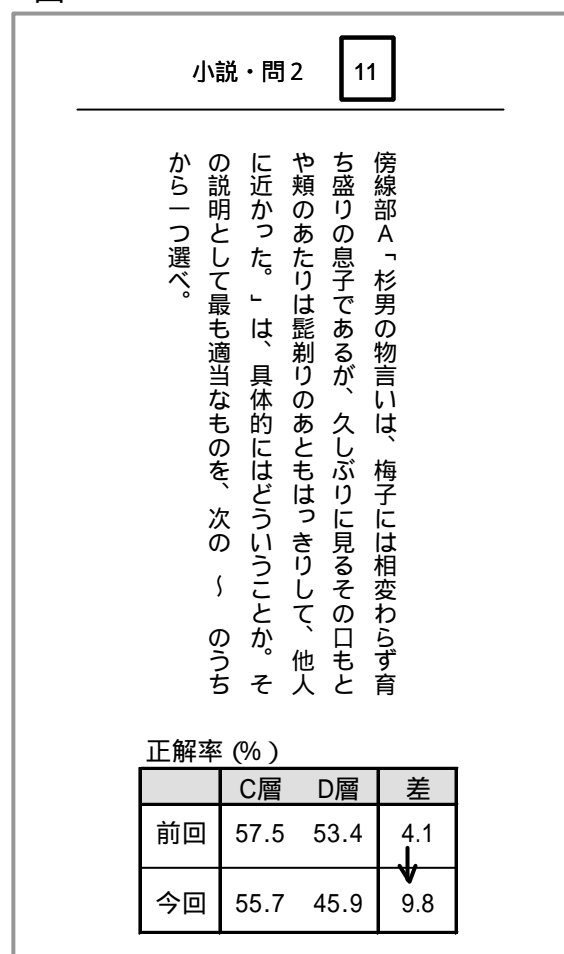


この設問は、4行後にある「全員の暴力を集中していくとき、群衆は痙攣的に固定化する」という部分を押さえれば解答できる。問2に比べれば平易であるにもかかわらず差が開いて

おり、正解率も低い。傍線部付近の丁寧な読み取りや同じ内容の表現を見つける力が不足しており、基本的な評論の読解方法に習熟することが、偏差値50を突破するためには必要である。

また、C層とD層の正解率の差がもっとも顕著なのは、小説である。先に見た学力A層・B層と同じく問1の(イ)や問4で差が大きい。その他に大きな差が見られたのは、次の設問である。

図7



母親の心情を問う問題である。「が」という逆接語を挟んで息子に対して相反する心情が表現されていることに気付けば問題ないが、「物言い」や「他人に近かった」という表現の根拠を本文に求めず、自分勝手なイメージで受け取ったら間違えてしまう設問である。

(2) 学力層別・学習習慣に見られる特徴

授業の予習や宿題への取り組みなど、いずれも学力D層に比べてC層の生徒が上回り、国語の学習に取り組む意欲に差が見られる。「授業を聞くよりも板書を書き写すことの方に集中している」生徒は、逆に学力D層に多く、授業内容を十分に理解できないまま、漫然とノートに書き写す様子が見られる。

(3) 学習指導の工夫

偏差値50の壁を乗り越えるための現代文の学習指導のポイントは、文章の特質を理解させ、読解の基本を徹底させることだと考えられる。

例えば、評論は主張と具体例が組み合わさった文章であり、常識に対して新しい物の見方を提示するものであることを十分理解させる必要がある。そのためには、作品構造をとらえさせるためのプリントを用意したり、接続詞や文末表現に印をつけ、文相互・段落相互の関係や文章の主旨を把握させたりすることが効果的であろう。今回の評論では、「一面的というべきです」「間違いだといえるでしょう」「必要があるのです」などの文末表現に着目すれば、筆者の主張を把握できたも同じである。

また、小説を読解する上で何より必要なのは、登場人物相互の関係と置かれた状況の把握であり、心情が読み取れる表現に着目していくことである。心情表現の読み取りが苦手な生徒には、大きくプラス・マイナスで押さえさせ記号化させることも方法の一つである。

例えば前述の小説・問2では、前半がマイナス、後半がプラスの心情を表すことに気づけば、選択肢の絞りこみも容易になるだろう。その他にも指示内容の把握や比喩表現の理解など、読解のために必要となる知識は多い。それら一つひとつを確実に身につけさせることで、偏差値

50の壁は乗り越えることができると考えられる。

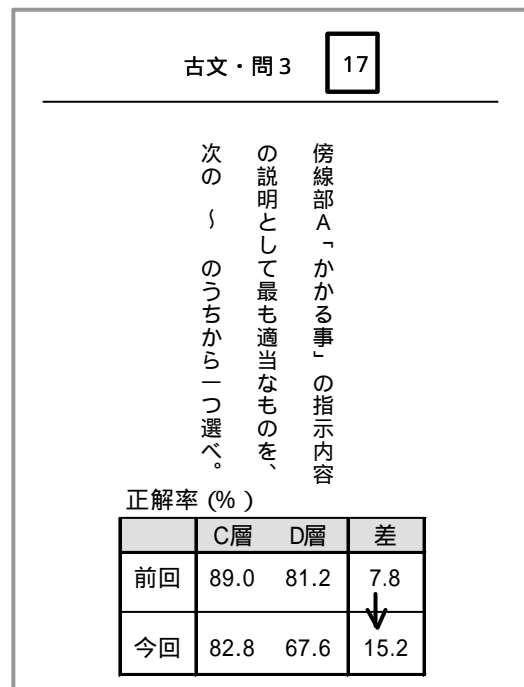
私が試みたいと思っている指導に「国語カルテ」を用いた指導がある。生徒一人一人に習得すべき事項を書き込んだカルテを持たせ、テストの度に到達度(・×などの簡単なものでよい)を自分で記入させる。そのことでぼんやりとしていた国語の学習が常に意識化され身につけるべき事項が明確となるのではないかと。現代文で最低限身につけるべき事柄にはどんなものがあるか、まずはその洗い出しから始めたい。

第4節 偏差値50の壁を乗り越えるための学習と指導・古典

(1) 層間差に見られる特徴

古文では学力A層・B層で見られた特徴と同じく、問1の(ア)や問4でC層とD層の正解率の差が前回よりも広がった。その他でC層・D層の間での正解率の差が前回よりも大きくなったのは、次の設問である。

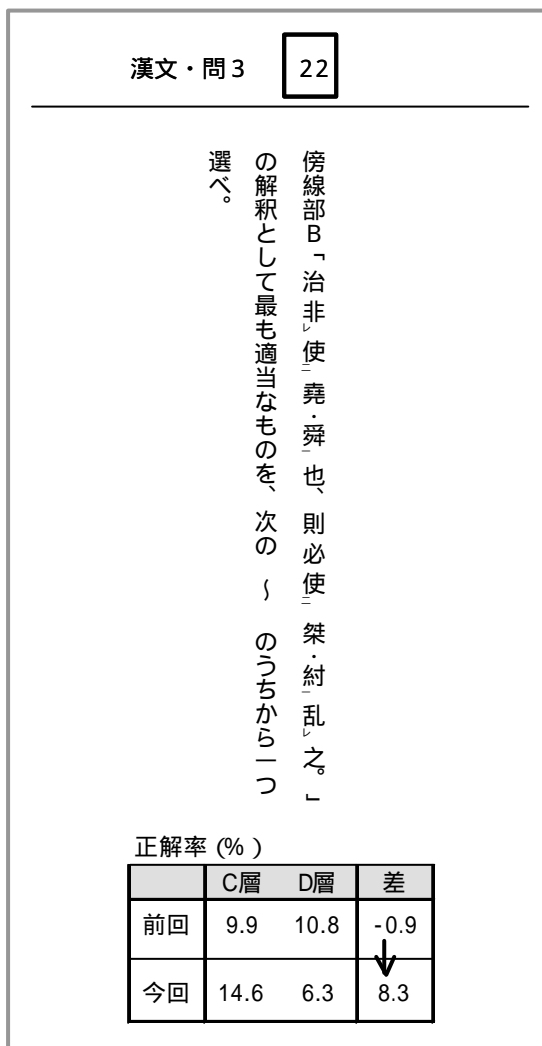
図8



指示内容は原則的に指示語の前にあるということを知っており、「夫～疲れ乞いをぞしたりける」「侍・中間ちゅうげん～責めたりける」という主語・述語のおおまかな把握ができれば容易な問題である。現代文と同じく読解の基本に習熟しているかどうか分かれ目となる。

漢文では学力 C 層、D 層ともかなり正解率が低く、両者の正解率には大きな差が見られなかった。その中であって問3だけが例外である。(図9)

図9



この設問を解くには、句法の正確な理解と同時に、直訳を意識できる能力が必要となる。「Aに非ずんば、則ちBなり」(Aでなければ、そ

のときにはBである) (AかBのどちらしかない)。日頃生徒やその答案に接してみて、このような表現を言い換える能力は、確かに低下しているように思える。

(2) 学力層別・学習習慣に見られる特徴

第2節の古典の分析に記述したものと同様の視点であるが、「国語が得意」と答えた生徒は学力 C 層が 34.5% であるのに対して、D は 22.7% と 5 人に一人となり(「非常に得意」「やや得意」の選択率合計)。国語嫌いは深刻である(図5)。中でも古典嫌いはかなりの割合に上るものと予想される。

(3) 学習指導の工夫

古典に対する学習意欲の減退をいかに食い止め、古典への興味関心を高めるかがポイントとなる。最近特に音読指導の大切さが叫ばれるようになったが、この層の生徒たちにこそ必要な指導であろう。古文・漢文の独特な言い回しに慣れるため、名文を暗記させることは、古典世界への呼び水になると考える。漫画の中にも古典を題材として有益なものも多く、視聴覚教材も充実しつつある。活字表現にこだわらず、様々なメディアを用いた授業や読書案内も可能である。また、予習プリントに工夫を加え、課題の難易度を明示して、最低限調べておくべき事項については確実に取り組ませるなどの方法も考えられる。古典への抵抗感がなくなり、基礎的・基本的事項の定着が図られれば、偏差値 50 の壁は乗り越えることが十分できるものとする。